

氏 名 紅林 健志

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1741 号

学位授与の日付 平成27年3月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 建部綾足の研究 和学と和文体読本

論文審査委員 主 査 教授 神作 研一
教授 大高 洋司
准教授 相田 満
教授 ロバート キャンベル 東京大学大学院
教授 風間 誠史 相模女子大学

論文内容の要旨

本博士論文は建部綾足が賀茂真淵に入門し、和学に志した宝暦13年(1763)以降の学芸を主な対象とする。特に、『西山物語』(明和5年<1768>刊)・『本朝水滸伝』(安永2年<1773>刊、後編は未刊)という二つの和文体読本と、その前提となる彼の学問について扱う。「和文体読本」とは、近世中期、和学(国学)の流行とともに、擬古文で書かれた読本類をさす。擬古文で書くことにどのような意図があったのか、それは当時の文芸思潮とどのように関わるのか、その一端を彼の学問から明らかにする。同時にこの和文体読本の文芸的内実についても触れる。

高田衛の「亡命、そして蜂起へ向かう物語——『本朝水滸伝』を読む——」(『文学』第52巻第4号、1984年4月)および「奇談作者と夢語——秋成・庭鐘・綾足をめぐって」(『文学』第43巻第6・7号、1975年6・7月)以来、綾足は、近世の社会的通念から自由な、独自の文学世界を築いた作者として、文学史の中で特異な位置に置かれてきた。また、三熊花顛著、伴蒿蹊補綴の『続近世畸人伝』(寛政10年<1798>刊)に記述された綾足の特異な言行と、彼の文芸の内実を、過剰に結びつけてきた部分もある。本博士論文では、こうした綾足評価に対し、なるべく近世の社会の中に綾足の文学を置くことをめざし、また、綾足の言行からではなく、作品に即した綾足像を提示することにつとめた。

第一部では、綾足の和学について論じた。

第一章、第二章は、綾足の論著の内容から、その学問の特徴を析出する。

第一章では、従来言及の少なかった綾足の片歌論書『とはしぐさ』(明和7年<1770>刊)をとりあげ、綾足の片歌説を、賀茂真淵周辺の歌論の影響を受け、中世という乱世の文芸を規範とするのではなく、古代の文芸を規範とすることで、近世という太平の御代にふさわしい文芸へと、俳諧を改革することを企図したものと位置づけた。

第二章では、綾足の『旧本伊勢物語』(明和6年<1769>刊)について、旧来の真名本の不備を補う、文意のとりやすい初学者向けの真名本を企図したものと指摘した。また真淵の『伊勢物語古意』(宝暦元年<1751>初稿成)を批判した『古意追考』(明和6年<1769>成立か)をとりあげ、彼の本文校訂の方法や、注釈の特徴を述べた。綾足の本文校訂は、単一の正しい本文をめざす当時の一般的な校訂と異なり、異文を許容する相対主義的な立場をとる点に特色がある。また、真淵の注釈に比べ、解釈において、物語中の道徳と自身の道徳観とを切り離すことができている、勸善懲悪的な文学観をある程度相対化できている。

第三章、第四章では、特に享受の面から綾足の和学を文学史の中に位置づける。

第三章では綾足の『歌文要語』(明和2年<1765>刊)と『はし書ぶり』(同3年<1766>刊)を増訂した、『増補歌文要語』(文化5年<1808>刊)と『新撰はし書ぶり』(文政3年<1820>刊)について、その成立事情を周辺の資料や内容から追った。『歌文要語』も『はし書ぶり』も、最新の和学の学説に基づいた歌文実作の手本として画期的な性格をもっていた。特に和文製作の参考書としては、享和頃でもいまだ代表的な書物であった。書肆奈良屋長兵衛は、綾足の和文家として評価を待み、両書の増補改訂版を企てた。両書の編者にはそれぞれの思惑があり、どちらも綾足の原本を単純に継承するものではないが、増補改訂版の刊行は、綾足の歌書の、実用性の高さが評価されたものといえる。

第四章では、『本朝水滸伝』の改題後修本『芳野物語』(文化6年<1809>修)に注

(別紙様式 2)

目し、同作が『水滸伝』の翻案としてよりも、和学の書として読まれていた実態を明らかにした。また、著名な曲亭馬琴の『本朝水滸伝』の文体批評が、和文が衰微した頃のものであり、綾足の時代にあっては、和文はそのまま雅の意識の反映であったことを指摘し、近世における文章観の変遷についても触れた。

第二部では、和文体読本の文芸的内実を論じた。

第一章では、『西山物語』には、予言によって長編構成を統御しようとする方法が見られるが、結果的に破綻しており、後の後期読本と比較して、長編構成の方法がいまだ発展途上であることを指摘した。また、『西山物語』には、主人公大森七郎と大森八郎の対立を軸とする「ますらを」の物語と、七郎の妹かへと八郎の息子宇須美の悲恋を軸とした「みやび」の物語があり、作品全体がこの二つの物語の論理が複雑に絡み合う形で構成されていることを指摘した。結末にはこの二つの物語の論理の対立が見られる点が特徴的であると結論づけた。

第二章では、『本朝水滸伝』は、従来『前々太平記』（正徳5年〈1715〉刊）を典拠とするものとされてきたが、これを再検証し、『日本王代一覧』（寛文3年〈1663〉刊）の方が典拠として優位であることを指摘した。また、『本朝水滸伝』は、成り上がりをも憎む落魄者たちの暗い情熱が底流をなしており、単純な反乱の物語とすべきではないと結論づけた。

第三章は、『本朝水滸伝』の中で、従来本筋には関わらない無意味な挿話とされてきた、秦金明の死について私見を提示した。暴虐をつくす主阿曾麻呂への諫言もむなしく、悲惨な死を遂げる金明だが、この金明の挿話には、諫言という行為の無力さを語るものであり、武力による反乱の根拠を再確認するものとしてここに置かれている。また、『本朝水滸伝』は大伴書持の死や、不破内親王・塩焼王の死など、情緒豊かな場面を描くところに、作者の力量を感じさせる。馬琴はこうした場面を勸懲が正しくないなどの理由で批判するが、これは後世の読本観であり、むしろ、綾足の読本は物語に学び、勸善懲悪的文学観から独立した作品世界を作っている点に特色があることを論じた。

以上の各章を通じ、綾足の読本が、長編小説の構成方法の上でも、一定の達成を見せていることを述べた（第二部第一章・第二章）。また、片歌の背景を述べ（第一部第一章）、『本朝水滸伝』の享受を追う（第一部第四章）ことで綾足が古語で小説を書く背景にどのような意識があったのか、その一端を明らかにした。一つは初学者への啓蒙の意識であり（第一部第二章・第三章）、一つは雅の意識であると想定できる。綾足にとって和文を書くことはそのまま雅の意識の反映であった（第一部第四章）。また、この雅の意識は、太平の御代に合致する文学を志向する意識と言い換えることも可能である（第一部第一章）。

また、綾足の物語研究は、賀茂真淵などのそれに比べ、勸善懲悪的文学観を相対化できている（第一部第二章）。綾足の読本は、馬琴によって「勸懲正しからず」と批判されたが、物語の影響を強く受けた綾足の読本（第一部第四章）は、綾足の物語観と通底する部分があり、勸善懲悪的な文学観から独立した作品世界を作っている点に特色がある（第二部第三章）。

太平の御代にふさわしい文芸のあり方をひたむきに希求し、教育啓蒙につとめた綾足の一面を明らかにした。学識などの点で不備も多いが、彼の和学は一定の達成を見せており、また独自の性格をもつ。綾足の活動は、和学が当時の文芸にどのような影響を与えたのかについての好例として重要なものといえる。

博士論文の審査結果の要旨

本論文は、江戸時代中期（18世紀）に、和学（国学）・絵画・俳諧・散文文芸（紀行・小説）など多方面にわたる文芸活動を行った建部綾足（たけべ・あやたり／1719 - 74）の、主として和学面における達成と、近世小説の一ジャンルである「読本（よみほん）」二作品（『西山物語』と『本朝水滸伝』）における文芸的内実を追究して、綾足の総合的考察を試みたものである。

全体は二部から成り、これに序章と終章を添える。綾足和学の諸相を解明した第一部と、和文体読本の作品論に挑んだ第二部の間には随所に関連性を見出すことができる。先に完結した『建部綾足全集』全九巻（国書刊行会、1986 - 90）の成果を活用し、その後の研究史を十分に踏まえた上での行論は安定感があり、これまで、ややもすると分断されて論じられてきた観のある綾足の和学と小説を、ひと続きの射程に収めて総合的に論じようと試みたことが本論文の最大の特徴であり、評価すべき点である。

第一部「綾足の和学の諸相」では、片歌（かたうた）論書『とはしぐさ』（明和7年〈1770〉刊／第1章）、伊勢物語研究の『旧本伊勢物語』（明和6年〈1769〉刊／第2章）、歌学書『増補歌文要語』（早川広海編・文化5年〈1808〉刊）と『新撰はし書ぶり』（石津亮澄編・文政3年〈1820〉刊／第3章）、『芳野物語』（文化6年〈1809〉修／第4章）を対象として、綾足和学の達成を粘り強く考証している。従来ほとんど顧みられなかった『とはしぐさ』を、「片歌」説の最も整備された書物として肯定的に捉えた第1章も、『旧本伊勢物語』に基づいて「異文」に対する寛容的態度を明らかにし、道徳的理解からの自立を見定めるなど、綾足の古典研究の特質を浮かび上がらせた第2章も、それぞれコンパクトにまとめられた好論と言えよう。また、あえて綾足の著を取り上げずに後人の編による増補改訂版を問題にした第3章は、綾足の歌学書の上方面における享受の一断面を、長い射程で浮かび上がらせることに成功している。総じて、粘り強い作業に基づいた丁寧な考証は申請者の研究手法と言ってよいが、それが最も生かされているのが、続く第4章である。この章では、『本朝水滸伝』の改題後修本である『芳野物語』が、『水滸伝』の翻案ではなく和学の書として読まれていた実態を、和学史・出版史の知見に基づいて明らかにしている。綾足本来の創作意図を反映して『芳野物語』へと改題された背景に、和学が普及した近世後期の時代相を指摘する論旨は的確で、説得力がある。

第二部の諸章は、二つの和文体読本（『西山物語』と『本朝水滸伝』）についての作品論で、構成と論理（第1章）、典拠と主題（第2章）、挿話の意図（第3章）を丁寧に論述する。細部にとらわれ過ぎず、物語の構造を大きく捉えようとする点に新しさがあり、作品全体の論理の枠組みに沿ってそれぞれのエピソードを理解することで、作品の新たな読みを提示している。『西山物語』の長編構成の中核を「ますらを」と「みやび」に二分して、「みやび」の物語表現を重視する申請者の姿勢は、本博士論文に一貫して見られる「雅」文芸を視座とする作品理解と、深いところで結びついたものである。また、『本朝水滸伝』の典拠として、従来重視されてきた『前々太平記』（正徳5年〈1715〉刊）よりも『日本王代一覧』（寛文3年〈1663〉刊）を優位と見る指摘も重要である。「反乱軍」と「政府軍」が対立する要因を、「すちなき」成り上がり者の道鏡と貴種仲麻呂との対決と捕捉したこととともに、作品の新たな読みの可能性を示すものであろう。

(別紙様式 3)

この第二部は申請者の綾足研究の起点であり、ままた言葉足らずの表現が見出されるところもあるがそれは瑕瑾に過ぎず、むしろ、綾足の読本がいわゆる勸善懲悪的文学観から独立した作品世界を形成していることを正面から肯定的に捉えた点に、近世後期小説研究への独自の問題提起が認められる。

全体に、先行研究への目配りは行き届いており、行論にも矛盾は感じられない。和学という軸を立てて「雅」の視座を貫こうと試みた申請者の意図は達成されていると見てよい。総じて本論文は綾足研究に新たな風を持ち込んだ意欲作であり、本審査委員会は、本論文が博士の学位に相応しい内容を十分に備えていると、全員一致で判断する次第である。